

エミリ・ブロンテの自然 にまつわる情念の行方

大平 栄子

C. D. Lewis は、'The Poetry of Emily Brontë', と題する論文の中で、'her passion, ..., was orientated always toward the inner world, not outward—not even outward to the Nature which she loved.' と述べ、Emily Jane Brontë の情熱が自然にではなく、内なる世界に向って常に方向づけられていたことを主張している¹。しかし、筆者は自然に対する情熱こそ Emily のあらゆる情熱の原点であり、また Emily の自然観が決定的に変わったとき自然と「内なる世界」がより深いところで結びついたと考える。

Emily の詩を読んでまず気づくことは、Emily が Hawarth の大地に特別の想いを寄せ、また自然のもつ不可思議な力に対し崇拝の念を抱いていたことであろう。Emily にとって故郷である Hawarth の自然の風景は、姉 Charlotte の言うとおりに、ただ単に眺められ、その美しさを愛でえられるものではなく、そこを住処とする野鳥や、そこに咲くヒースと同様、それなくしては生きられない空間であったとすることができよう²。故郷の丘は、Emily にとっていわば、巣であり、また子供時代の夢を育む遊び部屋であり、自然体験の原点であったと思われる。そこはまた帰ってゆくべき安住の地でもあった。

しかし、このように深く愛し、一つに隔けあった自然の中に衰えゆくもの、滅びゆくものを見、自然の限界性に目覚め、やがて外的世界に絶望した Emily は、自然から 'The world within' 「内なる世界」(No. 174, l. 8) への

転向をうたうようになるのである³。そこから「内なる世界」の Emily の探求は深まりをみせ、やがて「我が胸の内なる神」(No. 191, l. 5) を見出すことになるわけであるが、この「神」についてうたった詩の中で、Emily は 'And thou were left alone / Every existence would exist in thee' (ll. 23-24) と述べている。この詩句が「大地」や「月」、「太陽」そして「宇宙」を含む外的世界と「内なる世界」とが、Emily の「実在」についての深い認識において密接に結びつくことを示唆していると思う。従って本稿では、それはいかなる認識であるのかということと、そこに至る Emily の認識の経緯を主に詩作品にあらわれた Emily の自然観を検討しつつ探してみたい。

Emily が書き残した190あまりの詩のほとんどに自然描写がみられる。例えば、紫のヒースの魔力について (No. 94), 寂涼とした荒野の節くれだった古木 (No. 81) や、顔をしかめ、あざける森 (No. 6), 波のようにうねる荒野や、空を、暗き山々を照らす月 (No. 83), Eden のように金色に輝く大地, (No. 99), 「楽しく花開き静かに潤んでいく」ブルーベル (No. 100) といったぐあいに自然の諸々の様相、作用について Emily はうたっており、読者をそれぞれの自然の風景へと誘う。しかし Emily の詩の中で、'nature' ということばが直接用いられることは極めて少ないのである⁴。「自然」について語る場合、Emily は代わりに「大地」ということばを用いて、Emily にとっての自然というものを言い表わしていることは、例えば、「大地はあなたに靈感を与えないだろうか」という詩句で始まる次の詩 (No. 147) を読めば明らかである。その一部を引用してみよう。

Shall Earth no more inspire thee,

Thou lonely dreamer now ?

Since passion may not fire thee

Shall Nature cease to bow ?

.....

I know my mountain breezes

Enchant and soothe thee still—

I know my sunshine pleases

Despite thy wayward will.

.....

Yet none would ask a Heaven

More like this Earth than thine,

Then let my winds caress thee ;

Thy comrade let me be —

(ll. 1-4, 9-12, 23-26)

従って Emily にとって自然がいかなる意味をもっていたかを探るためには
まずは「大地」と Emily との関係についてみていくべきであろう。また、
この詩には「わたしの風」（「わたし」とは「大地」のことであろう）と、
「大地に似た天」ということばがみられるが、このことは、「大地」と共に頻
出し、「大地」と共にうたわれることの多い「風」と「天」が「大地」と密
接なつながりをもつことを示唆している。従って次に、Emily と自然の関係を
をさらに掘り下げるために、「天」と「風」についても「大地」との関わり
方を見てゆきたい。

Emily が Hawarth の荒野を、夏の空の輝きを、そしてヒースの原を吹き
渡る風をこの上なく愛したことは詩を読んですぐに気づくことである。確か
に、Emily の詩 (No. 2) には慈愛の雨によって芽がふくらみ、のびやかな
風によって生命を与えられ花開いた 'golden flowers' (ll. 18) が澄みきった空
からさす太陽の下で輝く様がうたわれている。しかし、一方では、咲いてい
た花々も枯れ朽ちてゆき、金色に輝いていた光も薄れ太陽は冷たい光をわび
しい空から落し、大地は緑の衣を失い、きらめく流れにはった氷は陰うつな
影を投げかける、というように時の移り変りと変容する自然を嘆く詩、ある
いは母なる「大地」が生み育てたその子等を冷たき胸に葬るといった自然の
中の「死」をうたった詩 (No. 149) もあり、むしろ、後者の詩にみられる、
Emily の失われた自然の輝きへの激越なる嘆きの感情を通して、自然への愛

着の烈しさを一層強く読者は印象づけられる。自然の栄光を称える詩もないわけではないが、そのような詩においても失われたものへのノスタルジアが常につきまとっている。それは虚妄なる自然への憤りと悲嘆のことばとなって詩の中で烈しく燃えあがる。なぜ風と戯れていた草花は散り、小鳥達は姿を消してしまうのか、なぜうたいさざめく流れは冷たい白い世界にうずもれ沈黙してしまうのか、といった自然の喜びのはかなさ、自然の輝きの移ろいややすさを嘆く声は Emily の詩のいたるところから聞こえてくる。このように変容する自然の現実に詩人は目覚め、さらに、かつて詩人の心に働きかけ、空想や靈感を刺激する力をもっていた「大地」がその力を失いかけていることに気づくのであるが、その時、詩人の悲嘆は一層深刻化する。Emily の自然への情熱の源は自然そのものの輝きへのノスタルジアにのみあるのではなく、その輝きが誘い出す夢にこそあると言えるだろう。かつて（1837年8月）詩人は、夏の日夕暮れ、その神々しい一刻が魂のうちの想いをあふれさせ、厳そかな喜びでみたすことをうたった（No. 27 の詩）が、後に1840年4月に書かれた詩（No. 135）では次のように、朝の陽の光も「幻」を描き出さないとうたうようになる。

Besides, the mist is half drawn ;

The barren mountain-side lies bare ;

And sunshine and awaking morn

Paint no more golden visions there. (ll. 5-8)

この詩は悲しみに疲れはてた「私」が恋人の死の床で涙を流すという内容になっているが、この詩と、「たった一つの本当の悲しみ」が 'the glory of sky' (No. 185, l. 5) を奪ったとうたわれている詩は、自然の輝きやその輝きが導く「幻」や夢は、現実の悲しみに囚われる時その力を弱めるということを示唆している。自然の不可思議な力が弱体化した背景には、Emily 自身の不幸な人生体験に基づく悲観的人生観と、そのような人生観を反映した自然観があると思われる。一部ではあるが次に引用する詩（No. 136）は、

Emilyの他の多くの詩と同様、物語の内容と自然現象とが判別し難い程重なりあっており、Emilyが人生を見る目で自然を見ていることを示す詩である。I'll not weep, because the summer's glory / Must always end in gloom ; (ll. 5-6) という詩句の後に、And, follow out the happiest story / It closes with tomb! (ll. 7-8) という表現が続くのであるが、「夏の輝き」が失われるという自然の理と、「幸福な物語」が墓で幕を閉じるという人間の運命とが同次元で扱われており、Emilyが時と死という視点から人生も自然もみていることを物語る詩である。人生の喜びのはかなさを知ったEmilyに自然は同じように微笑むことはなくなる。今やEmilyにとって朝の太陽の輝きもやがてせまりくる闇によって薄れゆくものにすぎない。このように自然を視る時、自然のもつ魔力は効力を失ってしまう。従って、自然が夢や幻を導く力を喪失したという嘆きは、むしろ、夢想する主体であるEmily自身が、現実に縛られることによって夢見る力を失ったことへの嘆きであると読むことができよう。

人生における挫折と失望は、'... I've shunned so long / Your gentle greeting, earth and air!' (No. 103, ll. 6-7) とうたわれているように、Emilyと自然、従って夢との関係を余所余所しいものに変える。子供時代からEmilyと自然との間にあった'sympathy' (No. 101, l. 11) は失われつつあることを詩人は次のようにうたっている。

May flowers are opening
And leaves unfolding free ;
There are bees in every blossom
And birds on every tree.

The sun is gladly shining,
The stream sings merrily,
And I only am pining

And all is dark to me.

O cold, cold is my heart !

It will not, cannot rise ;

It feels no sympathy

With those refulgent skies. (No. 101, ll. 1-12)

花やみつばちや、小鳥や小川が喜びに目ざめ躍動しているのに、その歓喜を一体となって味わうことができない「わたし」の冷たく暗い心、喜びを失い憔悴した心は、死の休息を求め I wish the damp earth covered / This desolate breast. (ll. 15-16) と悲痛な願いを洩らす。自然の輝き、歓び、に自然に隔けこむことができない心境を訴える詩はこの詩だけに限らない。現実を意識する心が自然の呪文を解き夢を破ってしまった時、子供の頃からの自然との一体感が失われてしまい、自然との間に埋めることのできない距離をつくったためであろう。

'Sympathy'が失われたと述べたが、喜びが絶え、暗く陰うつな心、荒涼とした寂しき胸には、輝く空や光あふれる大地といった喜びに光輝き、踊りださんばかりの自然は似つかわしくはなく、むしろ、ものいわぬ死者が横たわるじめじめした大地こそふさわしく、Emilyの詩において自然を形容することばとして頻出する'drear'な自然こそ共感できるものであったと言えよう。また、悲しみに囚われ、やつれはてた心が激しい歓びよりも休息を求めることは、'I loved the plashing of the surge, / The changing heaven, the breezy weather, / More than smooth seas and cloudless skies / And solemn, soothing, softened airs / ... Now I feel / Where silence dwells is sweeter far / Than laughing mirth's most joyous swell' (No. 93, l. 3-6, 9-11) とうたわれていることから読みとることができる。このように、「雲が乱れ風が騒ぐ空」や「波濤の激動」を愛し、そのような自然に純粹なる歓喜をおぼえたEmilyではあったが、今や詩人の心は、笑いさざめく感動のうねりで

はなく、静寂なる心と共鳴する自然へと傾斜してゆく。人生の躓きを知った詩人には昼輝く太陽は、ぎらぎらと照りつける情容赦ない非情な光でしかなく、その心は「大地」の与えるきらめくような激しい歓びよりもやさしい休息を求めて夜へと向かう。銀色の光をやさしく放つ月は、悲しみに傷ついた心を慰め、昼の現実の重い衣を脱ぎ捨て明るく美しい「夢」を見よと誘いかける。(その夢もやがてしのび寄る現実にもろくも消え去ることになるのだが。)

これまで見てきたように、詩人の心の色合の変化に伴って求める自然の色調も変わるわけであるが、その心は締めと愛着との間をたえず揺れ動くため、自然も微妙な光と影の模様を映し出すことになる。「静寂」の中に歓びを見出したことをうたった詩についてはすでにふれたが、その詩の中に‘Yet my heart loves December’s smile / As much as July’s golden beam ; (ll. 30-31)’という表現がある。この詩では「十二月の微笑をも愛す」となっているが、「十二月の微笑」への思慕というよりはむしろ、七月の季節と与える歓喜へのEmilyの強い憧れを読者は印象づけられる。なぜなら、この‘December’s smile’への思慕の情は、くる夜もくる夜も雪が丘を包み風が荒ぶる戦いをおこす現実の光景に、夢が障げられることを予感した「わたし」自身が、枯れた草の中ですみれがひっそりと咲くという光景を想い描こうとして思いとどまるという状況の中で述べられており、輝やかな季節において、より強力に作用する夢見る力への憧れがそこから透けてみえるからである。

以上見てきたように、輝やける自然の虚妄性を知らされたEmilyは、しばし見せる自然の輝きに魅了されながらも、その誘いを斥けるのであるが、かと思うと、また激しく執着するといったように、Emilyと自然との関係は、Emilyのその時々的情念や葛藤を映し出し、揺れ動くのである。そしてさらにそれに「天」への憧憬が加わることにより、一層複雑で微妙なものになってゆく。

1841年5月16日の日付のある詩において、Emilyは‘none would ask a

Heaven / More like this Earth than thin' (No. 147, ll. 23-24) とうたっているが、「大地」への愛着と「天」への憧憬を集約している詩句ではないかと思う。この詩の場合は「大地」と「天」にまつわる Emily の欲求が「大地に似た天」という概念によって折衷され、矛盾することなく取りこまれているが、他の多くの詩の場合それは Emily の心を引き裂く。Emily は一体「大地」と「天」とをどのような関係として捉えていたのであろうか。そもそも、Emily にとって「天」とは何を意味するのであろうか。

Emily の詩においては、'heaven' と 'earth' は対になっている場合が多く、その場合の 'heaven' は、自然の天空、'the sky' と同義語であるとみなすことができる。つまり 'heaven' は「大地」と同様自然そのものを意味し、また「大地」と同様、その輝きがやさしい思い出と甘い夢を呼びさまし、慰めと安らぎを与えることもいくつかの詩にうたわれているとおりでである。また「天」は、ノスタルジアをかきたてる。雪が窓格子から吹き込むうす暗い牢獄の中で足枷と鎖で縛られている囚人をうたった詩 (No. 15) があり、その囚人がわびしさをかみしめながら想いをはせるのが夏の日の楽しい緑の野であり、切に求めてやまないもの、それが 'a land serene' (No. 15, l. 46.) と 'the arch of heaven divine' (l. 47) すなわち「大地」と「天」である。この詩は Emily 自身が故郷をはなれ、Law Hill School へ赴く直前に書かれた詩であることを考えると、金色の雲のゆく澄みきった空を想う人は、故郷への想いを断ち切れず旅立とうとしている Emily その人であると思ってよいであろう。そのような想いは No. 55 の詩にもうたいこまれている。夏の夕暮れ、雲に覆われることなく太陽は輝き、夏の 'heaven divine' (l. 6) をすぎてゆく。薄明の影は濃くなり、星々がその青さを深めてゆく。はるか遠くはなれた荒野で「私」は 'that solemn sky' (l. 12) を悲しくみつめたという内容になっているが、No. 11 の詩と同様、「天」は 'divine' と形容されており、特別の想いがこめられていることをうかがわせる。

このような想いが自然の天空の崇高さに、さらに神秘性を加えたイメージ

へと発展し、そのつくられた vision に Emily は憧れの気持ちを強めていくことになったのではないかと思う。そのきざしは初期の詩 (No. 23) の中にも読みとることができる。冥想している時 (冥想している者が誰であるか語られていない)、わびしい静寂から稲妻がおこり、その後起きたことを Emily は 'a breathing from above, / And then a star in heaven brighening — (ll. 6-7) と表現している。この 'heaven' は明らかに自然の夜空を表わしているが、「天上からの息吹」との関連で読んでゆくと、自然の空に神秘的要素が加わることを予感させるものがある。

初めて 'nature's heaven' 「自然の天空」 (No. 137, l. 14) とは異なる抽象化された「天」がうたわれたのは 1840 年 5 月 6 日と 1843 年 7 月 28 日の二つの日付のある詩 (No. 137) においてである。

That heaven is reigning in my thought,
Which wood and wave and earth have caught
From skies that overflow.

That heaven which my sweet lover's brow
Has won me to adore'
Which from his blue eyes beaming now
Reflects a still intenser glow
Than nature's heaven can pour.

.....
Then art thou not my golden June
All mist and tempest free?
As shines earth's sun in summer noon
So heaven's sun shines in thee.

(No. 137, ll. 7-10, ll. 11-14, ll. 30-33)

これは明らかに Gondal に属する詩であり、A. G. A がもの淋しい僧院の中

で淨らかな光を求める人々に背を向け、はるかに美しい聖堂を A. S. (Lord Alfred Of Aspin) への愛の中に見出し、「わたしの樂園」(l. 45) をつくるため、永遠を求め祈りをささげるといことがうたわれている。A. G. A.の想いに‘That heaven’「あの天」(l. 10) が君臨していることがうたわれているが、この「天」とは‘nature’s heaven’ (l. 14) が注ぎ得るよりも一層烈しい光輝を反射する「天」とであると言う。Emily は A. G. A.の永遠なる愛という仮想の下で、「自然の天」とは異なる、淨らかに祝福された、光の地(No. 149)に通じる「天」への憧憬をうたいこんでいるように思われる。但し、「あなた」(A. S.)は「わが黄金の6月であり」(l. 30),「大地の太陽が夏の真昼に輝くように天の太陽はあなたのなかに輝く」(ll. 32-33) という表現や、「あなたのなかに輝く」太陽が軌跡をめぐる「天」とは「森や海や大地があふれ流れる大空(‘skies’)の流れから捕えた天」(ll. 8-9) であるという描写から詩人の自然(の天)への愛着を読みとりうるし、また、そうした想いをひき摺りながら新しい「天」のイメージは展開していったのではないかと思う。

次に、「大地」と「天」との関係を Emily がどのように捉え詩にうたっているかみてみよう。まず、「大地」と「天」は暗闇と栄光のように対立するものとして Emily の詩に登場するが、嵐の真夜中、荒野のヒースが高く波打ち、空に月の光と明るく輝く星々があるような夜には、「大地」と「天」は隔け合うともうたわれている。(No. 5) また、大地の露がその故郷である天へ戻るという内容をうたった詩(No. 78)もあり、朝花のうえをさまよった露は初めに輝やかな栄光があったところ、「天」へ再び戻ると述べられているが、そのような「天」への Emily の憧れがこめられている詩である。Emily の詩には、「天」の慈愛、慰め、栄光、祝福ということばが目立つが、それらを受けるのが「大地」であり、「大地」は「天」の恵みによって潤い、「天」の愛によって輝きを増すのである。「天」が栄光の輝きを授けてくれる時、「夏の草が一層鮮やかな緑に茂り、夏の花が美しく咲き乱れる。」(No.

162 ll. 11-12) また、「天」の恵み深い微笑みは「大地」に光をふりそそぎ、春の草を美しく緑にそめるばかりか、大地の下で眠る死者にさえ恵みをたれるのである。(No. 158) さらに、「自然」が「天」の輝きを装う時、不思議な境地へと詩人をさそうこともある。No. 153 の詩では幻のような姿、「黒い髪」をした「彼」と、光の髪をした「彼女」を見たことがうたわれている。また No. 170 の詩では、「大地」が「天」の栄光に包まれる時、神秘なる世界がヴェールを脱ぎ去るさまが描かれている。木々が揺れ、小鳥は喜びのうたをうたう夏の午後、「私」はヒースの土手に休み夢想にふけっている。すると大気の中で「幾千万の火」がちらつくのがみえ、「幾千万の銀の堅琴」があちこちに鳴り響くのを耳にする。その続きを引用してみよう。

Methought the very breath I breathed
was full of sparks divine,
And all my heather-couch was wreathed
By that celestial shine.

And while the wide Earth echoing rang
To their strange minstrelsy,
The little glittering spirits sang
Or seemed to sing, to me:

(No. 170, ll. 45-52)

ヒースの寝床が「天上」の光輝で飾られているようであるとか、小さな「精霊たち」の不思議な歌にあわせて広大なる「大地」がこだまするというように神秘的光景が描かれているが、この詩の中でうたわれているような、「大地」が「天」の光によって輝く瞬間は非常にまれであることは、「Shall Earth no more inspire thee?」(No. 147, l. 1) という詩句に代表されるような嘆きのうたが執拗にうたわれていることから推量できよう。「大地」が靈感を与える力を失ってしまったのかという問いかけの背後には、「天」の栄光、祝福はもうよみがえることはないのかという訴えがある。なぜなら、

Earth reserves no blessing / For the unblest of Heaven ! (No. 186, ll. 35-36) という詩句が示唆しているように、「大地」が輝き、夢を誘うのは「天」の祝福、愛があふれ地に注がれるからであり、しかもその「天」の愛は、'... If heavenly love be born / In the pure light of childhoods' morn —' (No. 143, ll. 67-68) とあるように、「子供時代の朝の清らかな光」の中にこそ生まれるのであるから。

以上見てきたように、詩人の中で「大地」への失望と烈しい愛着が交錯しているが、「天」についても相反する感情と visions があることを指摘できる。それは懂れる世界である、光輝く「天」と、そこでは'alien' (No. 150, l. 27) 「除者」として疎外される見知らぬ異国でしかない「天」という二つの visions である。「天」に対する憧憬についてはすでに述べたとおりであるが、『嵐が丘』(1848)において Catherine が死の床で口にする'that glorious world'の中にもそれは現れている⁵。一方、「天」は自分の来るべきところではないのではないかという作家の不安もまた、Catherine の見た「天国」の夢の中に投影している。天国で、Catherine はヒースの原へ帰してほしいとだだをこね天使達を怒らせてしまうのだが、詩においては逆のケースがうたわれている。

"Methought the heaven, whence thou hast come,
was lingering there awhile ;
And Earth seemed such an alien home
They did not dare to smile.

.....

And pure as now my angel's soul
Must go to Heaven again." (No. 150, ll. 25-28, ll. 47-48)

これは、1841年8月17日の日付のある詩であるが、Geraldine の腕に抱かれて眠る我が子は、実は「天」からやってきたこと、「私の天使の魂」は再び'Heaven'に帰らねばならないこと、また「大地」は'an alien home'に思えた

ことなどが語られている。Catherine の見た夢と同様、Emily の帰るべき家、故郷への特別な想いが映し出されていると思う。この詩は「天」の子供にとって帰るべき家という設定になっているが、同時期に書かれた詩 (No. 149) では、逆に「大地」の子としての自覚が強く打出されている。「天」から光の子等が降りてきて「大地」の子等の悲しみを慰めるという内容は幾度か詩にうたわれ、そこにも「天」への熱い想いがこめられていたわけであるが、この詩においては、*Earth would wish no other sphere / To taste her cup of sufferings drear ; / Ah mother, what shall comfort thee / In all this boundless misery ?* (ll. 25-26, ll. 29-30) という詩句が示すとおり、「天」への憧憬どころかこの母なる「大地」の深き苦悩を慰めることは「天」にもできはしないと、「天」の介入を毅然として拒絶する内容となっている。「大地」は天界から冷やかに眼を背け (l. 27)、一人無限の悲惨にたえつつもわが子に温かな笑みをみせる。このような母なる「大地」への子等の愛を「光くるめく天上界」 (l. 35) ですらも忘れさせることはできない。また「浄らかに祝福された天すらも私の魂に安息をもたらすことはできない」 (ll. 13-14) という。それは、母なる「大地」への愛のためだけではなく、「大地」の苦悩、悲哀を忘れ去ることができないからでもある。そして Emily はこの詩を次のように結んでいる。

We would not leave our native home
For any world beyond the Tomb.
No rather on thy kindly breast
Let us be laid in lasting rest ;
Or waken but to share with thee
A mutual immortality. (ll. 41-46)

この「墓の向こうにどんな世界があろうともわたしたち（「大地」の子等）は生まれた家を決して去って行きはしない。」という詩句から「天」への憧れを読みとることはできない。「大地」への想いの深さ、烈しさはどこまで

も「天」への憧憬の念を越え、ついには憧れの芽を摘み取ってしまったのであろうか。この情念は、「大地」への愛着ゆえにほとぼしるだけでなく、「地上で見聞きした悲傷」(ll. 11-12) すなわち「大地」の苦悩により深く関わっていると思われる。「時」と「死」と「生」の苦悩が癒しえぬ傷痕を残したと言われているが、この苦悩の地を捨て、「天」へおもむいたとして、はたしてそこで本当に安息がえられるかという疑問が Emily の中であったのではないかと思う。‘How clear she shines!’ (No. 157) と題する詩には悲惨きわまる世界の描写がみられるが、「天上」にはそのような世界は一つもないと思おう、「輝やかなしい天体の中の「天」が終りなき年歳、終りなき祝福の中を光の軌跡を動いていると思おう」(ll. 22-24) という詩句には、「天上」にもそのような悲しみが無いといえようかという懐疑の心がこめられているように思えるのである。未知であるからこそ憧れ、と同時に不安をもつわけであるが、「大地」の悲惨なる現実を直視すればする程、「天」の vision はその暗い影を振り払って光輝くことができなかつたのではないかと思う。この詩の約2年前に書かれた‘Shall Earth no more inspire Thee,’で始まる詩 (No. 147) の中の、次の詩句——「大地に似た天をこれ程気違いじみて恋慕ったものはあなたの他に誰もいない」——が示唆しているように、見知らぬ「天」の vision は、輝きを見せる「大地」のイメージを永遠というエッセンスを加えて脹らませたものであろう。しかし「大地」への失望を味わい尽した者には輝く「大地」は幻でしかなく、苦悩に深くしづむ「大地」こそ現実の姿であるという認識がめばえたとしたら、光輝く「天」への懐疑も生じることになるであろう。従って、見知らぬ世界である「天」の不確かな祝福から Emily は目を再び「大地」へと向け、そこで、「不滅の生」を求めることになったのではないかと思う。後に、詩 (No. 190) の中で、「大地の希望はそれ程死にたえてはいず」「天の家」(‘Heaven’s home’) はそれ程いとおしくはなかつた。」(l. 111) と述べるが、この「大地」の希望は、大地の母の胸を永久に流れる「生命の甦りの潮」(No. 183, l. 12) という概念

の中に見出すことができる。「大地」とともに「不滅の生にめざめよう」(No. 149, l. 46)とうたった時、すでに、「大地」の隠れたる本質は半透明のヴェールの下からおぼろげに見え始めたのであろう。「天」への期待が挫折し、再び「大地」への希望にすがらざるをえなくなった時こそ、「大地」の真の姿は見え始める。「大地」の輝きが与える喜びを失った Emily は、やがて喜びの支えはなくとも、「生命の本質」‘existence’ (No. 182., l. 23) が慈みをうけ強くはぐくまれることをうたうようになる。そこから外的自然と自己とは、‘existence’によって接点をもちはじめる。

かつて、目に映る「大地」の美しさ、その「大地」の装いの奥に何か神秘的なるものを直観した詩人は、それを「天」の栄光、祝福としてうたった。しかし、その「天」の栄光が顕現しなくなった時、つまり、「大地」の輝きが消え去り、輝く「大地」と詩人をとりまいていた夢が消えた時、失われたものを Emily は何によって取り戻そうとしたか。自然の与える歓びのはかなさを知った Emily が安らぎをえられるのは、夜の静寂さの中であり、そこで現実の重圧から解放された夢想は自由に空間を飛びまわるのである。またこうした夜の孤独の瞑想の時は、Emily の内的世界への扉を開放し、灰暗い領域へ、そしてさらに奥の闇黒の世界へと誘いこんでいったと思われる。その誘惑者は「風」であった。

Emily にとって「風」が単なる自然現象にすぎないものでなかったことは明らかである。それどころか、「風」は自然とその現象の奥深きところに隠れている自然の本質とを結び位置を占めている。「風」によって空想が刺激され、あるいは靈感が満ちてくることは再三詩にうたわれているとおりでである。特に夜の風は静寂さをいや増し、日常的感觉、現実意識を剥ぎとり、夢見る人を瞑想の淵へ沈める、そしてさらにそこから自然のみえざるところへと誘う力をもつ。Emily がひたすら待ち望む「訪問者」、あるいは「使者」が訪れるのもこのような晩、西風に乗ってである。この訪問者との出会いを、超自然との霊交であるとみることもできようが、一方、No. 190 の詩の中の、

「眼にみえざるもの」「隠れたるもの」(l. 81) が実の相を顕すという詩句の意味を、眼に映る自然の奥に潜む本質が明らかになる瞬間と読むことができるように、自然の神秘との触れあいであると考えられることもできよう。頬に触れ、耳にささやき、鼻をくすぐり季節を運ぶ「風」、木々を揺るがし、雲をけちらし、うなり声をあげる「風」、しかしその姿は見えない。あまねくゆきわたり、生命を吹きこむ「風」。その‘life giving wind’は、と同時に‘Death comes on every wind,’ (No. 75, l. 32) という詩句が暗示するように生命を奪うものである。Emily はそのような「風」の仕業に自然の見えざる姿を想い描き、その「風」に隔けこむことによって自然の神秘を垣間見ようとしたのであろう。Emily は1841年7月6日の日付のある詩において、その神秘を‘A principle of life’「生命の原理」(No. 148, l. 19) ということばで表現している。その詩の一部を引用してみよう。

Yes, I could swear that glorious wind
Has swept the world aside,
Has dashed its memory from thy mind
Like foam-bells from the tide ——

And thou art now a spirit pouring
Thy presence into all ——
The essence of the Tempest's roaring
And of the Tempest's fall ——

A universal influence
From Thine own influence free;
A Principle of life, intense,
Lost to mortality. (ll. 9-20)

嵐は、まどろむ人を揺り動かし神秘の世界へと誘うのである。その「栄光あ

る風」(I. 9) は世界を吹きとばし、その記憶をも消し去ってしまう。世界が消え、すなわち、「大地」も「天」も「月」も「星々」もあらゆるものが消えたとき、初めて現象という装いの下に隠されていた真実がみえてくる。それが「嵐の怒号の、嵐の襲来の精髓」(II. 15-16) であり、「あらゆるものに存在をそそぎこむ精霊」(I. 13) であり「生命の原理」である。眼ざめた人は突然おこりくる嵐と溶けあい、それらを感じしようとする。嵐が叫び狂い、木々を押し倒してゆく。そうした激しい動き、変化の奥底に静かにじっと動かさず、永遠に変らないものがあることを Emily は知ったのである。「不滅の不動なる岩」の如く決して破壊されずに在り続けるもの、それが後に「実在」、「息吹」ということばで表わされる idea へと発展した原理ではなかるうか。

Emily は自然と一体感で結ばれていた子供時代に、自然の中に「天」の栄光が輝くのを見た。また自然が輝く時、「幻」が現われることも詩にうたわれている。この「幻」あるいは「精霊」は現象としての自然の背後に潜む「実在」を意味するのではないかと思う。Emily はその「あらゆるものに存在を注ぎこむ精霊」(II. 13-14) がどこから訪れるのかを突き止めようとして、光輝く「天」やその光をまとう「大地」や「大空」、そして「地獄」に至るまであらゆるところを探し求めるが、その果てしない探求はすべて水泡に帰す。その時、初めて Emily は翻って自己の「内なる世界」へと目を向けることになったのだと思われる。Emily は 'So hopeless is the world without, / The world within I doubly prize; (No. 174, II. 7-8) と述べている。

このように「外的世界」に絶望した Emily は「内なる世界」に望みをつなぐわけであるが、そこでは、'We hold a bright unsullied sky, / Warm with ten thousand mingled rays / of suns that know no winter days? (No. 174, II. 16-18) とうたわれているように、冬の日を知ることのない太陽の光が満ちあふれ、生命は春の輝きを取り戻すのである。このように外的世界に希望を見失った後も、「内なる世界」で求めようとしたものは永遠なる自然

であったわけであるが、この永遠の vision は理性の声に障げられながらも Emily の心の内の世界の探求と共に深まっていったと思われる。外的世界から「内なる世界」へと目を転じた時、これまで見ることのできなかつたものが見え始める。「内なる世界」へと降下することによって「外的感覚」(No. 190, l. 82) の拘束から解放され、自由になった時、Emily は異なる視点を獲得することになったと思われる。すなわち‘my inward essence’ (No. 190, l. 82) によって世界を見ることができたとき、「眼にみえざるもの」が姿を顕し、これまでみることができなかつたもの、永遠へと通じる自然の本質が見え始めたと言えよう。これが「生命の本質」であり、この永遠の生命の vision は、外的世界において、死と滅亡の現象に捕われている者によって育まれるものではなく、「内なる世界」でこそ発展する vision であったわけである。

「内なる世界」についてうたった後の詩において、Emily は、時と死が支配する墓のような世界で喜びも地中に葬られてしまっても、そこには‘existence’が慈みをうけること (No. 182) や、母なる「大地」が永遠に尽きることのない「生命の泉」を養うこと (No. 183) などをうたうようになる。このことから、Emily が、あらゆる現象の奥にかくれている真理、永遠の生命の原理に目覚め、探求しつつあることがわかる。Emily は、No. 188 の詩において「未知の永遠の深きところに」(l. 34) ‘what is to be’ 「あるべきもの」(l. 36) を心に求めさせようとうたっているが、これが‘Being’ (No. 191, l. 27) あるいは「我が内なる神」へと発展していく概念であろう。この詩の中で「あなたには今だに何と大地は美しいのだろう」(l. 1) 「春があなたにまだ栄光をもたらし、夏は12月の陰うつな時を忘れさせる」(ll. 5-6) とうたわれているが、Emily は、一方で、この世の喜びは常に包摂せるとも言う。たとえ春の輝きが栄光をもたらそうと、それは自然の美しい姿の奥により輝やかなしい「実在」を求めようとする者にとって喜びとはならない。それが真の光の輝きの単なる美しい装い、あるいは影にすぎないことを、すでに、

「生命の本質」(No. 182)に目ざめ始め、生と死の円環の中に永遠の vision を見た (No. 183) Emily は知っていたからである。

自然界の複雑で微妙な諸々の現象に惑わされず、あるいは心掻き乱されることなく、真実を見ることができるのは、Emily 自身の「内なる世界」においてであった。そして自己の「内なる世界」の深部へと限りなく近づくことによって滅びやすい肉体という外的自然に通じるものではなく、永遠なる自然へと通じる「生命」を感じることができたわけである。従って内側から自然の限界を超えたというより、内側から、限定された自然のヴェールの下に隠されていた自然の「実在」、永遠なる「生命の原理」を掘りおこしたと言える。この「実在」の中には、あらゆる存在、「大空」や「大地」や「月」や「太陽」が存在するという。あらゆる存在を含む「実在」が「わたし」の中にあり、「わたし」はその「実在」の中にいるという、「わたし」と「実在」との絶対矛盾の関係は、究極的には「内」と「外」とが同一であることを示唆している。Emily は、自己の内奥に秘められていた「生命の原理」を発見することによって、内なる自然と外的自然との間にあった障壁が消え、自然が「生命」において一つになることを認識したと思われる。

以上見てきたように、自然の神秘は、自己という自然の内奥の世界に光をあてることによって解明されることになったわけである。しかし、「内なる世界」で発見したものは、自然の本質でもあり、また自己の本質でもあったと思う。なぜなら、'Being'「実在」あるいは「我が胸の内なる神」とは自己の存在の核であり精髓であるからである。「わが胸の内なる神」をうたった詩 (No. 191) は、自己の内なる未知の存在、自己の内になって自己を越えた存在を発見することによってあらゆる存在、自然のすべてを知ることができるということも示唆している。「自己の内なる精髓」が感じる時初めて「眼にみえざるもの」が真実の相を顕すと No. 190 の詩にうたわれているように、自己の存在が明らかになるにつれ、自然はしだいにその実体をあらわす。Emily にとって自然は自分を映し出す鏡のようである。たえず変化して

やまない自然は、自己の存在の最も奥深いところで全体性を獲得し、ここに
至って初めて真に自己と世界、あるいは宇宙は一つに隔けあうことができ
るといふ Emily の認識を「我が胸の内なる神」の詩は物語っている。

注

- 1 C. Day Lewis, 'The Poetry of Emily Brontë,' B. S. T., No. 2 of Vol. 13, 1957, reprinted 1968, Wm. Dawson & Sons Ltd., London, p. 96.
- 2 Charlotte Brontë は『嵐が丘』(Emily Brontë, *Wuthering Heights*, 1848, reprinted in 1972, Penguin, p. 38) の序文の中で次のように妹 Emily の故郷の丘に対する思慕の念を説明している。'her native hills were far more to her than a spectacle; they were what she lived in, and by, as much as the wild birds, their tenants, or as the heather, their produce.'
- 3 本稿において、詩からの引用はすべて次の版を使用した。*The Complete Poems of Emily Brontë*, ed., by C. W. Hatfield, Columbia Univ. Press, 1941.
- 4 *A Concordance to the Complete Poems of Emily Jane Brontë* ed., by Shinichi Akiho and Takashi Fujita, Shogakukan, 1976.によると、'nature' ということばは 'Nature's', 'Natures' を含めて 14 回使われている。一方 'Earth' は 'Earth's' を含めて 69 回使われている。
- 5 Emily Brontë and Anne Brontë, *Wuthering Heights and Agnes Grey*, The Hawarth Edition, AMS Press, reprinted in 1972, P. 167.